

# The 8<sup>th</sup> ASIA TEFL INTERNATIONAL CONFERENCE Hanoi, August 6-8<sup>th</sup>,2010

参加者

ELEC同友会理事長 慶応義塾大学名誉教授 明海大学名誉教授	小池 生夫
豊島区立駒込中学校長	醍醐 路子
東京都立西高等学校 主幹教諭	佐藤 留美
東京都杉並区立東田中学校 教諭	平出 敏

## 1. はじめに

8月6日から3日間に約300にも及ぶ発表があり、各国から400名を超える参加者があり盛会でした。Lunch timeやCoffee Breakでは参加者同士の交流もあり、アジア各国の英語教育の現状を直接知ることができました。韓国・中国・台湾など英語教育に先進的に取り組んでいる国々や開催地ベトナムのように英語を学ぶ必要性や熱気に乏しい国々などさまざまでした。

成田国際空港からベトナムのハノイのNoibai 国際空港まで5時間半、時差は2時間ありました。空港からタクシーでハノイに向かいました。豊かな田園風景が広がり、農耕用の牛の姿が見られました。ところどころに椰子の木が生え、熱帯であることを伺わせました。空港からハノイ市内まで35km。約40分でハノイ市内に入りました。バイクが縦横無尽に走り、車はそのバイクに警笛を鳴らしながら縫うように走っていました。バイクは二人乗り三人乗りは当たり前で、子どもまでしがみつくように乗っていました。交通信号が少なく、道路も未整備でした。逆走するバイク、直前を左折するバイクなど、交通ルール無視が多く、道路を横断するにも命がけでした。

一方、歩道に椅子やテーブルを持ち出し、夕方からお茶を飲んでいる人々がみられました。夜になると家族で食事をしている姿も見られました。夜の9時、10時には宴会をする人々などののどかな姿が見られました。歩道が家族の団らんや隣近所、友人同士の社交場になっているようでした。日本の都会では隣近所の交流が希薄だったり、「孤食」が増えている中で、こうしたハノイの人々の生き方に考えさせられました。

困ったことは言葉が通じないことでした。Hilton Hotelとタクシーの運転手に告げても通じませんでした。英語を理解する人が少なく、わたしたちもベトナム語ができないので、意思の疎通に苦労しました。

こうした機会を与えてくださった小池生夫先生並びに言語教育振興財団に感謝します。

## 2. 参加した研究発表報告

豊島区立駒込中学校  
醍醐 路子

### 2.1. Opening Ceremony

ベトナム民謡やベトナム現代歌謡の美しくも朗々とした生演奏アトラクションに迎えられた私は、会場Latanh Guest Houseの大会議場に続々と各国の参加者が立錫の余地もないほどに集まって来るのにまず驚かされた。開始時刻にはその数およそ7～800名ほどにも達していただろうか。私は前列のほうに席をとり、開催国ベトナムの、そしてアジア各国の英語教育への情熱と現状をしつかり体感、吸収するべく、写真、ICレコーダーとともに記録を開始した。

Asia TEFL 会長であるDr.Hyo Woong Lee のスピーチでは、経済不況にあえぐ現代社会にあって、この学会がアジア地域各国、各地域の相互共益に寄与するべく‘strive’するのだというコンセプト、また、現在39地域、13,000人の会員を擁するAsia TEFLが、近い将来50,000人にまで拡大、発展することを目指しているとの壮大な夢も語られ、その発想の大きさに感嘆の思いであった。

また、開会式では学会理事の教授陣が紹介されたが、慶應大学・明海大学夫名誉教授小池生夫先生に寄せられる研究者、教授陣からの敬慕の大きさには滞在中を通じて感銘を受けた次第である。

### 2.2. Plenary Speechより

**“Developments in Bilingual Education and CLIL: Asian and European Perspectives.”**

**Dr. Richard Johnstone (University of Stirling, Scotland, UK)**

長年スコットランド言語教育研究情報センターのディレクターを務めてこられた Richard Johnstone 名誉教授は、Bilingual Education と CLIL に関するアジア圏ならびにヨーロッパ圏での展望について述べられた。

Johnstone 名誉教授はここ数年の間にもアイルランド、スペイン、スロベニ

ア、中国、韓国、台湾、日本、インドでの講演を行っておられ、Oxford University Pressなどへの精力的な執筆活動や、大学院での調査研究の指導など、欧州・アジアを網羅しての広い活動範囲が印象的である。

最近の主な調査プロジェクト：

- a) スペインにおけるバイリンガル教育の評価
- b) ポルトガルの早期バイリンガル教育について
- c) ブリティッシュカウンシル東アジアネットワーク開発プロジェクトーインドネシア、タイ、韓国、フィリピン、ベトナムにおけるバイリンガル教育に関する政策、課題と展望について

彼のスピーチのなかで、非常に論理的、明快かつ示唆的であると感じたのは、‘Factors effecting language Education at School’の段落である。彼は、4 Factors を、“Societa”、“Provisio”、“Process”、“Individua”とし、なかでも“Societa”について下位分類を‘Extent of TL Exposure’、‘Political Will’、‘Geo-Cultural Situation’、‘Parental Pressure’、‘Influence of Media’、など“Provisio”について下位分類を‘National Policy Support’、‘Teacher Supply, Training and Development’、‘Research’、‘Information’、‘Continuity Primary to Secondary’などに細分化して分析しておられるのが、ひとつひとつ納得のいくことであった。このようにして冷静に関連要素を検証していくなれば、バイリンガル教育のみならず英語教育全般の発展にもつながるのではないかと思う。

私が今特に日本で課題であると感じているのは、上記にもあったように「小中の接続・連携」である。この点において文部科学省は基本的に各都県、また地区教育委員会に多くを委ねており、したがって地域間格差が非常に大きい。また、「教員養成・研修」についても日本ではまだ多くの課題を残していると言わざるを得ない。

Immersion Education、Content-Based Teaching についても今後可能性を探っていく必要があると考える。

## 2.3. 参加したセッションのなかから

### 2.3.1. Elementary School English Education-What we see in comparison of Japan & S.K.

Keiko Yonaha (Meio University)

・韓国と日本の対比を試みた理由

韓国の小学校英語教育は1997年からすでに10年の歴史があり、TOEFL

スコアにおいても年々両国の平均得点に開きがでてきていること、また日本の英語教育にかかわるすべての人々に韓国英語教育に関心をもってほしいと思うこと

◆大きな相違点

- ・韓国では120時間の小学校教員研修が必修（日本では必修ではない）
- ・韓国では3，4年生で英語授業年間34時間（日本では総合学習で5～15時間）
- ・韓国では検定教科書がある（日本にはない）
- ・韓国では聞く・話す活動を主体とするものの、読む・書く活動も取り入れる（日本では聞く・話す活動が中心、読む・書く活動は教えない）

◆日本の小学校英語教育の問題点

- ・小学校担任の英語教育力
- ・小中学校を見通したカリキュラムの一貫性の欠如
- ・学習指導要領が具体性を欠き、内容・方法ともに地教委に委ねられ、地区によりばらつきが生じていること

また、与那覇氏は、韓国の子供たちに比べ、沖縄の子供たちの英語学習に対するモチベーションが低いというデータを示し、国や教師がもっと国際的コミュニケーションの重要性を教えなければならぬだろうとも述べていた。

◆文部科学大臣の姿勢

2006年、伊吹文部科学大臣は小学校において英語の必修化は必要ではない。との見解を示している。

- ◆上記のように政策的展望がないため、英語教育の実質的改善がなされにくく、明確な目標がないため意思決定も遅れ、学校現場が行動に移しにくい。

**2.3.2. Development of Creativity and Innovation of English Language Teachers of Primary Schools through Research-Based In-service Training**  
**Bambang Yudi Cahyono (State University of Malang)**

調査結果によれば、インドネシアの多くの小学校英語教員の英語指導力は十分とは言い難く、何らかの現職研修が必要である（しかしながら国家としての全土にわたる現職研修政策というものはない。日本と等しい状況にあるようだ。）。このセッションは、インドネシア英語教員現職研修の発展についての発表である。

突然の雷鳴やスコールとともに驚きながら、イスラムのベールを被った十数名の女性教員と楽しげにEnglish Songs, Games の実技を交えながらプレゼンテーションを行うカイヨノ氏であったが、創造的な授業を行うためには、まず子供たちの認知発達の知識が教員に必要であることを述べていた。また、innovative であるために、教員は実際的方法論を身につける必要があること、そのために開発されたのが以下の2つのパッケージである。

第1のパッケージ：“Techniques of Teaching English for Young Learners”  
CTL と呼ばれる実践的スキル (contextual teaching and learning approach)  
PAKEM と呼ばれる実践的スキル (attractive, creative, effective and joyful approach)  
CL と呼ばれる実践的スキル (cooperative learning)

第2のパッケージ：“Classroom-Based Action Research for English Language Teachers”  
授業で起こりうるさまざまな問題に対処するための調査研究手法

応用・発展に至る現職研修プログラムが、小学校英語教員を励まし、より創造的、innovative な授業づくりに役立つであろうとの結論であった。インドネシアの初等英語教育の道筋はまだ緒に就いたばかりと見たが、専任の英語教員の数も限定的であるとのことである。

### **2.3.3. Choices of Language Learning Strategies Used by Thai and Vietnamese University Students: Similarities and Differences**

**Attapol Khamkhien (Kasetsart University)**

タイにおける英語教育は、継続的努力にもかかわらず標準テストにおいて満足のゆく成果が得られていないようである。グローバリゼーションの進展するなか、teaching strategies, learning potential とともに国際社会の要求に応えられる水準をめざして改善を図るために、カンキエン氏は1 language learning strategies のタイ、ベトナム両国における調査研究をKasetsart University (タイ) とThe University of Social Science and Humanities (ベトナム) の学生を対象に調査を行った。

\* Learning Strategies (Oxford 1990) \*

1 Memory Strategies-新しい情報を蓄え、記憶する技術

2 Cognitive Strategies-正確に理解し言語を生産できる能力

- 3 Compensation Strategies-代償的表現を使える行動
- 4 Metacognitive Strategies-学習の企画・調整・評価行動
- 5 Affective Strategies-感情、動機づけの技術
- 6 Social Strategies-言語学習過程における他者との良好なコミュニケーション行動

その結果、以下の結論を導き出した。

- ・高い英語力を身に着けることに成功した学生は、幅広く多種のlanguage learning strategies を駆使している。
- ・場に応じた適切なlanguage learning strategies を選択できることが、第2外国語の習得に高い効果をあげている。
- ・特にタイの学生に対する動機づけの強化が必要である。
- ・strategies に対する意識づけが学生の英語力向上に不可欠

#### 2.4. この他に参加したセッション名と研究者名 (所属)

\* From communication to content:Trends toward content-based language instruction.

(Heath Rose)

\* A Story – Telling Approach in Language Teaching. (Abdul Rahman)

\* Teaching Native Culture and National Values Through English. (Tatiana Ivankova)

\* Developing Young Learners' Interactive Skills. (Mira Namsral)

\* Medical Ideas and Scientific Devices for Listening Research. (Kyung Whan Cha)

\* Increasing Students' Spoken English Competence Through Video Project.

(Fransiskus Ransus, S.S.)

\* Critical Reflective Teaching in the 21st Century: Using Video Software for Critical Self Reflection and Peer Feedback. (B.Greg Dunne)

\* Content ,Culture and Critical thinking in an Era of Global English. (Clyde Fowle)

#### 2.5. まとめ

初めて訪れたベトナム共和国の歴史・文化にも様々な意味で圧倒されるものがあったが、なにより私の滞在した2日間だけでも193ものセッションが14箇所の会場で繰り広げられ、発表する研究者の国籍も相当の数であった。この学会の息吹は伝えようとしてもし切れないほどである。発表内容も多彩かつ今日的で、体がもう一つ欲しいほど、関心のあるテーマ発表が多かった。幸いプレゼンテーションの抄録が充実しており、研究者のメールアドレスも掲載されている。今後の連絡や問い合わせにも活用でき、自分自身の研究ばかりでな

く東京都中学校英語教育研究会の、また全国英語教育研究団体連合会の研究資源としても役立てさせていただけるものと感謝している。

貪欲に会場を涉猟し、‘Global English’について、また英語教育を通じた‘Critical Thinking’の育成、‘Motivation, Self-Esteem’を高める指導、異校種間の連携など、今後の英語教育向上のヒントや果実を多数得ることができた。

貴重な国際学会参加の機会を与えて頂いた小池生夫先生と言語教育振興財団の皆様に変更して心より感謝申し上げます。

### 3. 参加した研究発表報告

都立西高等学校  
佐藤 留美

#### 3.1. はじめに

第1日目は校務の関係で参加できず、第2日目から参加した。ベトナムというと、「ベトナム戦争」とのイメージが強く、アジアといえども遠い国とのイメージが強かった。しかし、成田から5時間強でいける国は紛れもないアジアであった。ハノイ空港から都市部へタクシーで移動したが、目に入る光景は日本の農村部のそれと見まがうような田園風景が続いていた。農機具が機械化されておらず、牛が農耕作業の多くを担う点は大きく異なっていたが、風景は一昔前の日本であった。

まだまだ貧しく、人々の移動はバイクや自転車が主な手段であり、鉄道も現地の人にはあまり使われているふうではなかった。ハノイ駅からは立ち並ぶ民家の間をぬうようにレールが走っていた。駅の周辺を何度かタクシーで通ったが、一度も列車は目にしなかった。

一昔前は自転車が移動の主な手段であったらしいが、今はバイク。どこに行くのもバイクらしい。一家に一台はあるらしい。車には関税が2倍かけられているらしく、日本で300万円ほどする車は600万円ほどになるらしく、ひと月の給料が2万円ほどの庶民には手が出るはずがない。車に乗っているのは軍人か、政府高官ということらしい。ハノイ大学で日本語を勉強し、現在ガイドをしている、青年は以前日産の工場で働いていたらしいが、月収2万5千円で、アパート代2千500円、食費等を払うとほとんど貯金が出来ず、ガイドになったらしい。道路もいたるところ舗装が剥がれている。鉄筋コンクリートむき出しで、内装はなく、2階の外装=道路側の壁もない建物にブルーシートをたらして住んでいる人もいれば、塀に有刺鉄線を張り巡らし、警備員のいる家に住んでいる人もいる。貧富の差が大きい。

一般市民は、必然的に移動はバイクである。家畜の移動もバイクであり、バイクの荷台に手足を縛り、牛を移動する市民もいる。家族が移動するのもバイク。4,5人乗りは当たり前。バイクと父親の間に子ども一人が立ち、父親の後ろに子どもが二人。その後ろに母親が乗る。皆がしがみついて一台のバイクに乗る。「孤食」、「親子断絶」などとの言葉は別世界である。親子夫婦仲良く幸せそうに見えた。

旅行社の方が、「猛暑の東京より涼しいかもしれませんよ」と言っていたが、やはり暑く、全く涼しくはなかった。夕立もあったが、雨の後は更に湿気が上がり、冷房のある建物に非難するしかなかった。芭蕉の葉で編んだ帽子は頭にふんわりとのり、頭と防止の間に風がとおり、ベトナムの夏を考え編み出された文化だと感じた。

教育が全員に行き届いているとは言いがたい、ベトナム。その中でも、ホーチミン廟のある共産主義国のメッカとも言える首都ハノイで国際会議を行う意義は大きいと感じた。

今回の会議のテーマがTeaching English as a Global Language: Creating and Sharing the Asian Framework of Practiceであり、英語圏で使用される英語ではなく、国際語としてのアジアの英語を教えるにはどうすればよいかとのテーマであり、英語を教えている国の文化もふまえてその国独自の英語があり、それを一つのスタンダードとしていこうという会の趣旨には大いに共感した。

以下参加した分科会の報告をしたい。

### **3.2. A General Patten of Chinese Intermediate EFL Learners' Receptive Vocabulary Size Growth: A Cross-Sectional Study**

**Yuhang Wang**

中国での英語教育のシステムを中心に発表があった。学年を追って、学習する語彙、語句等がマエラの語彙サイズをもとにきちんと決められており、国家戦略としての英語教育が強力に進められている印象を受けた。レベル1からレベル6まで分けられて、どの学年でどのレベルに達するかが明示されている。小学校3年から英語を学習し、大学に入学するまでに10年間英語を学習することになる。語彙数も9000 word-family学習し、日本人が太刀打ちできないのは自明の理か。

### **3.3. Teaching Writing Skills: Motivating Students to Write**

**Linh, Tran Dang Khanh**

ライティング指導を英語の交換日記で指導した過程を発表した。書き方の細かい指導よりも、時系列でおきたことを順番に記述していき、書くことがそん



なに難しいことではないという暗示を生徒にかけつつ指導していた。生徒の日記が回覧されていたが、その日記は日本の生徒たちの日記と変わらず、カラフルなキラキライラスト付きの日記であった。共産圏で全く文化も違う国でも若者文化にそんなに大きな差異はないと驚いた。また、発表者の英語を聞いていて、日頃から授業も英語で行っているのがよく分かった。英語の授業は英語で、と今更ながら指導要領に書かなければならない日本の現状に改めて、思いをさせた。発表者のThe mediocre teacher tells. The good teacher explains. The super teacher demonstrates. The great teacher inspires. — William Arthur Ward の引用の言葉が心に響いた。

### **3.4. Literature from Outside in and from the Inside Out**

**Alan Maley**

詩の朗読から始まり、音の美しさを改めて教えてもらったplenaryだった。しかし、小説や詩も必ずしも、英語圏の詩や小説を生徒に読ませる必要はなく、その国のものを採用し、教材として使うのもよいとの指摘があった。当然といえば当然だが、英語圏の英語がauthenticであるとの意識を持ちがちな英語教師にとっては必要な指摘だったかもしれない。

### **3.5. Improve students' learning autonomy in Japanese educational settings**

**Shien Sakai - Takagi & Kiyota**

生徒のautonomyは教師のautonomyがあってはじめて成り立つ。ではどういふふう到我々のautonomyを育成するのか。生徒のlow self-esteemを高めていく方法が発表された。unsuccessful experienceを通してlow self-esteemが生まれる。いかにして成功体験をさせるかがやはり大切である。

### **3.6. Teaching English in the Asian Way**

**Wang Haixiao**

今までは、the 'standard' Englishを求めていたが、今はWorld Englishesの時代である。locally produced materialsを教え、我々の文化を教える時代になっている。respect for differences and find something newという言葉には感銘を受けた。Western centeredではない、自国centeredな教育というコンセプトに共感する。

### **3.6. Asian Perspectives for a Common Framework of Reference for Languages**

**Ikuo Koike**

日本の英語教育の現状を発表。アジアにヨーロッパ同様のスタンダードがあっ

てもよいころあいであると主張。アジアとしてのunityとの意識を参加者に植え付けた。

### **3.7. Issues in English Education in the Primary Schools — with Emphasis on the Transition to Secondary Schools**

**Kensaku Yoshida**

2011年から始まる日本の小学校英語教育について発表。英語以外の教科はexperimental learningがあり、中学校からの学習にスムーズに入っていけており、ほとんどの教科でtake-offが出来ている。しかし英語教育は、中学校に入っていたんは学習意欲が出るが、中学1年の終わりから文法が難しいとの理由で意欲が急に下がる。それをなくすために小学校英語を導入。できる項目と学習時期や学習期間と相関関係がないのは、小中の連携がうまくいっていないからである。また英語と日本語の違いを強調しすぎて英語を教えてはいないか。Japanese Identityを強調しすぎてはいないか。Find out Japan more through English.との言葉が印象的であった。

### **3.8. おわりに**

来年は韓国ソウルでアジア学会が開催される。そのホスト国の運営委員が次回の大会アピールを行ったが、韓国人の熱意と英語力に圧倒された。民族性、韓国の地理的位置も関係しているであろうが、国際社会の中での韓国、韓国人のあるべき姿をいつも頭に描いて、英語教育のあり方を考えている様子がよく分かる。日本は地理的に他国と接しておらず、何か外国で起こっても海を隔てた出来事と考えがちである。しかし、もう少し世界の中の日本の役割、あり方等をもうそろそろ真剣に考えてもよい時期ではないだろうか。新指導要領での「英語の授業は英語で」との指針を真剣に受け止め、これからの英語教育を考えていく必要がある。今回の大会参加でアジアの英語教育そしてアジアの中で、広くは世界の中で日本の果たす役割、そのために必要な英語力、そのためにはどんな英語教育が必要か、考えさせられた。

機会があれば次回のソウルでの大会にも参加をしたいと強く思った。

今回の機会を与えてくれた英語教育財団英語小委員会に感謝し、これからの英語教育に少しでも貢献できるようこの機会を生かしていきたい。

## **4. 参加した研究発表報告**

東京都杉並区立東田中学校  
平出敏

#### **4.1 The Use of IT in Language Teaching at University Level**

**Natalya Archakhove**

発表者はロシアのSakha Republic (Yakutia)のNorth-Easter Federal UniversityのSenior teacherとして英語を教えています。Sakha Republicは300万平方kmに人口は約100万人だそうです。冬は-50°C、夏は30°C、35°Cにもなるそうです。学習は本や教師からではなく、学習者の心に知識が形成されるという考え方から、ムードル (Moodle) というフリーソフトを使っているそうです。MOODLEは学習者が自身の経験に基づいて学習を進めることができるそうです。

Moodleは、オープンソースのeラーニングプラットフォームでオンラインの学習過程 (コース) を作ることを助けるパッケージソフトです。

インターネットを通して、イギリスやアメリカと交流しているそうです。意見の交換ができます。Moodleを開くと、学習者が書いたトピックを読むことができます。話題は、British Tradition, Independence Day, Food in the USA, School Education in Russia, Education in Great Britain, Student Life at Oxford Universityなどさまざまなタイトルがあります。自由に選んで読むことができ意見の交換ができるそうです。

また、テストも教師だけではなく、学習者自身もできるそうです。

#### **4.2 English Through Film Adaptation Across Cultures**

**Juanit Huan Zhou**